

青森県立郷土館所蔵の鈴木正治石彫作品について

太田原 慶子⁽¹⁾

Documentation of Stone Carving by Suzuki Masaharu

OTAHARA Keiko

キーワード ; 鈴木正治 彫刻家 青森市 石 錦石 黒曜石 日本アンデパンダン展

はじめに

青森市出身の鈴木正治(1919～2008)は、昭和期から平成期にかけて同市を拠点に活動した彫刻家である⁽²⁾。屋外にある代表的な作品に、青森県庁舎隣の青い森公園(青森市長島1丁目)の新町小学校跡地記念碑[思い出の像](1984年)や青森県総合社会教育センター(同市荒川藤戸)の中庭にある[わ](1989年)といった大型の石彫作品などがある。

青森県立郷土館では、平成16(2004)年に特別展「鈴木正治展」を開催し、26(2014)年には、彼の制作活動を長く支援し、多くの作品を収集してきた齋藤葵和子氏(青森市)から2000点を超える彫刻や絵画作品を受け入れた(一括受入番号2277、当館では「齋藤葵和子コレクション」と呼んでいる。以下、齋藤コレクションという)。平成27(2015)年の寄贈記念企画展「彫刻家・鈴木正治の世界」開催後は、それぞれの作品形態や技法で分類・管理しながら、県内市町村の博物館や美術館と連携・共催した展覧会などで作品を紹介してきた⁽³⁾。

令和7(2025)年度は、青森市森林博物館との共催展「鈴木正治・きのしごと」で、版画も手がけた正治の[きのしごと](孔版、1986年、2015図録66頁)に描かれている[とじる][ぶらさがる][つながり]などの木彫作品と同館所蔵品と併せ42点を展示した⁽⁴⁾。また、サテライト展「石!?!あつめてみました」(以下、石展という)では、石彫作品23点を展示した(下写真:展示風景)⁽⁵⁾。

本稿では、齋藤コレクションの石彫作品の概要と錦石や黒曜石といった特色ある石材を用いたもの、彼が石彫に取り組み始めた動機や背景をうかがうことができる作品について報告し、今後の公開活用に役立てたい。

齋藤コレクション・石彫作品

齋藤コレクションおよそ2000点のうち、石彫作品は156点で作品タイトルが不明の作品が過半数を占める。

タイトルが確定できるもののうち、同一タイトルで複数あるのが[誕生]20点、[ウゴカズ]は10点、[笑]6点、[リンゴ]4点、[二つのわ]3点、[地蔵]3点である。

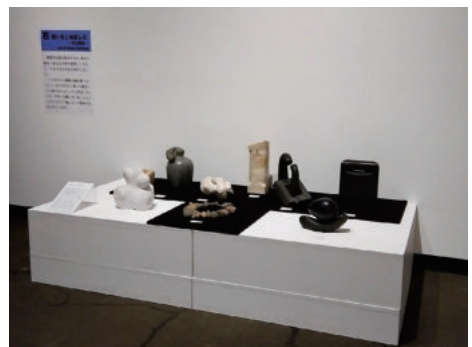
正治40歳代後半の作[鉄の庭](1964年、図版44)、[横たわるトルソー](1970年、図版14)、[芽](1974年、図版13)から、[水牛](1999年、図版25)、[タイトル不明](2000年、図版43)といった80歳前後の作品があり、彼の彫刻家としての40年の軌跡をたどることができる。

利用石材としては、大理石、御影石が多く、特殊なものとしては、錦石、黒曜石がある。特殊な石材を素材とした作品から次のようなことが考えられる。

錦石を用いた作品

[わ](図版36)及び[タイトル不明](図版37)は、錦石を素材としたものである。

錦石は、津軽地域を中心に産出する本県特産の石で、非常に硬く、磨いてその色や光沢を楽しむ。2点とも、大人のこぶしのほどの大きさ(最大径14cm前後)でやや赤みがかった錦石を磨いた作品で、金属の軸を通して台に固定することで、石を浮かせるように見せる。この



令和7年度青森県立郷土館サテライト展「石!?!あつめてみました」(会場:青森県立美術館企画展示室)における展示の様子

1) 青森県立郷土館 学芸副課長・学芸主幹(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

方法は、第9回読売新聞社主催アンデパンダン展（1957年）に38歳の正治が出品し、高く評価された〔生成〕（個人蔵、2004図録31頁）と共通するものがある。

石本来の形にほとんど手を加えることなく、磨いて内部の色や質感を引き出そうとする意識が見て取れる錦石素材の2点は、〔生成〕制作前後の作品の可能性が高いと考えられる。齋藤コレクションの石彫作品の中でも、もっとも早い時期のもので、正治が本格的に石彫に取り組み始めた40歳前後の作とみていいのではないか。

黒曜石を用いた作品

黒曜石を素材とした〔タイトル不明〕（制作年不明、図版38）がある⁽⁶⁾。最大径12cmほどの楕円形で、一部を磨き、白濁しざらざらとした質感の表面とは異なった光沢ある黒色、つややかさを見せる。表面の状態や形状が県内（つがる市・出来島海岸）で産する黒曜石とよく似ているため⁽⁷⁾、前述の錦石を用いた作品とともに、青森県産の石材を用いた可能性の高い作品と考えられるが、入手時期や入手方法は判然としない。しかし、黒曜石を素材とした作品は、齋藤コレクション以外をみても他になく、現時点では唯一のものである。なぜ彫刻素材として扱いやすいとはいえない黒曜石を作品にしたのか、その背景を考えてみたい。

戦後、美術の道を志し、昭和22（1947）年、28歳で当時通信制だった東京の中央美術学園に入学した正治は、在学中は読売アンデパンダン展に油彩画を出品するなど⁽⁸⁾、彫刻よりも油絵に関心が強かった。やがて、他人と比べて色彩感覚が劣っていると感じたことから⁽⁹⁾、彫刻に転向、本格的に石彫を手掛けるようになり、第8回アンデパンダン展（1956年）からは、彫刻作品を出品し始めた。実は、ちょうどその少し前に、彼に大きな影響を与えた石との出会いがあった。黒曜石との出会いである。これが、彼の石を彫り始めた動機と深く関わっているのではないかとすることを中村徹氏は指摘している⁽¹⁰⁾。正治は、中村徹氏の父親である美術評論家中村傳三郎（1916～1994）に、石彫を始めた理由を書き送っていた。それによると、ある展覧会で黒曜石を用いた作品に出会い、その材質からくる質感に惹かれ、石を彫り始めたというのである。

それからの正治は、身近にあった木材を使い、黒曜石の色と質感を出そうとした。木彫作品に黒漆を塗り、光沢と質感の表現に取り組んだ。〔トルソー〕（木彫、2004図録30頁）、〔オニ〕（木彫、同33頁）、〔角巻〕（木彫、2015図録26頁）は、いずれも制作年代がわからないが、そうした効果をねらったものと思われる。

昭和30（1955）年制作の木彫〔ねぶた〕（右）は、彩色したものに黒漆を重ねている。こうした作品から、黒曜石の透明感ある色と質感を目指し、一人試行錯誤を繰り返していた時期があったことがわかる。正治は、黒曜石へのあこがれを傳三郎以外に打ち明けることもなく、自ら語る事がなかったと思われるが、「自然の石が持つ本来の色や質感、形を、時間をかけて探り当てていくこと」⁽¹¹⁾が彫る行為であるという彼の心の底にあり続けたのではないだろうか。

黒曜石との出会いは、彫刻家鈴木正治に大きな影響を与えた。本作品（図版38）は、表面からは見えない、内部の透明感ある黒色や光沢、質感を探り当てるように磨いたものであり、彼の石への強い思いを感じることができるものである。



木彫〔ねぶた〕、1955年
7.5×6×18.4（高さ）cm、
登録番号2277-24-204
一度彩色した上に黒漆を塗布している。

二つのわ

同一の材質から二つ（複数）の輪を作り出すモチーフ〔二つのわ〕には、単体の石をくりぬき複数の輪を作る方法と、同一石材の複数の石からそれぞれ輪を作り、それらを組み合わせて一つの作品とする方法がある。

白い〔二つのわ〕（1994年、図版33）は、凝灰岩単体を内側に向かって掘り、二つの輪を作ったもので輪は離れることなくつながっている。黒い〔二つのわ〕（制作年不明、図版34）は、黒御影石を素材としたものである。同一の石材から二つの輪を作り組み合わせて一つの作品とする。方形と円形としての形、磨き方を変えて色や質感も異なる輪を組み合わせて一つとなる。もう1点は小品で、黒色と白色の大理石でそれぞれ輪を作ったものである（制作年不明、図版35）。

正治は〔わ〕に、人と人がつながる「輪」と平和の「和」、そして、津軽地方の言葉でいう「わ（自分、私）」の意を込めたという（工藤2014）。一つのもので二つにわかれることがあり、二つのものでも一つになることができる、〔わ〕には、そんな鈴木氏の深い精神性が表されているように思える。

終わりに

齋藤コレクションの石彫作品のうち、特色ある素材を用いた作品から、正治の石彫に取り組み始めた動機や石への思いについて考察した。

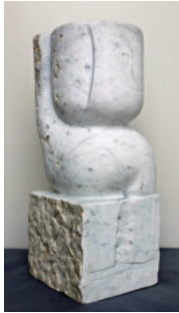
彼は、故郷青森にこだわり、制作活動を続けた彫刻家である。彫刻だけでなく、版画や墨画などさまざまなジャンルに取り組んだ。また、自身の制作活動のみならず、本県美術界の先人、版画家の今純三や洋画家の松木満史の作品整理にも尽力し、その功績は大きい。

青森県産の錦石や黒曜石の他、身近な素材である石の本来の色や形を探りながら「石工」のように⁽¹²⁾磨いて彫り続けた彫刻家・鈴木正治の作品を、今後もより多くの人が楽しみ、その魅力を共有することができるよう、公開活用を進めていきたい。

註

- (2) 生涯や経歴、活動については、對馬恵美子(「鈴木正治の世界」青森県立郷土館図録『特別展 鈴木正治』98～101頁、2004)や工藤正義(『鈴木正治の軌跡—津軽が生んだ魂の造形』草雪舎、2014)が詳しい。
- (3) 当館展覧会図録としては、前掲(2)の2004図録の他、『寄贈記念 齋藤葵和子コレクション 鈴木正治作品選』(2015)がある。当館研究紀要での報告は以下の通り。
對馬恵美子「資料紹介 鈴木正治の木彫『誕生』『ウゴカズ』」(青森県立郷土館研究紀要第39号、2015)、伊丸岡政彦「資料紹介 鈴木正治の空摺り」(第40号、2016)、中村理香「資料紹介 鈴木正治の絵画作品(ウゴカズ・誕生)」(第46号、2021)、「資料紹介 鈴木正治の絵画作(ねぶた・春夏秋冬)」(第47号、2023)、「資料紹介 鈴木正治の絵画作品(山・十和田湖・後藤伍長)」(第48号、2024)、「資料紹介 鈴木正治の絵画作品(○△□・りんご)」(49号、2025)
- (4) 会場は、青森市森林博物館(同市柳川2丁目)、会期は9月6日から26日。
版画「きのしごと」と同作品に描かれた木彫作品の内容は、前掲(2)の2015図録66～67頁を参照。「きのしごと」展の展示作品の注目点や見どころについては、令和7(2025)年9月4日付東奥日報・ふるさと万華鏡66回「鈴木正治・きのしごと～触れて楽しんで」で紹介した。正治は、青森県立弘前工業学校(現在の県立弘前工業高等学校)在学中に、旧柏村(現在のつがる市)出身で彫刻家の工藤繁造の指導を受けて木彫を制作した。工藤の影響を受けたと思われる作品に「馬と二人の農夫」(1936年)などがある(2025年10月9日付東奥日報・ふるさと万華鏡71回「彫刻家・工藤繁造～心に迫る力強さ～」)。
- (5) 会場は、青森県立美術館(同市安田近野185)、会期は11月15日から翌26年1月18日。
「石」を多様な観点からとらえ、身近な事物への興味関心から青森県の自然や文化への理解を深めることをねらいとした展覧会。本展では「石の芸術～思いをこめました」というコーナーを設け、齋藤コレクションの中から、鈴木が石の色や質感、自然のままの形を活かした作品を展示した。令和7年度青森県立郷土館サテライト展覧会カタログ『石!? あつめてみました』11頁。
- (6) 2015図録41頁では「一(いち)」だが、2004図録40頁では「題不明」と記載。石展では「題不明」とした。本稿でも「題不明」とする。
- (7) 筆者も形状、質感ともよく似た黒曜石原石を出来島海岸(つがる市)で採集している。
- (8) 正治の読売新聞社主催日本アンデパンダン展出品歴は以下の通り。第9回から読売アンデパンダン展と改称。
第2回(油彩)「ドラム缶」「民謡をきく娘等」第3回(油彩)「バラエティショウ」第4回(油彩)「ゆきあと」「タンク」第5回(油彩)「えんぶりA」「えんぶりB」第6回(油彩)「ねぶた」第7回(洋画)「めくらの夫婦」「中国のおどり」第8回(彫刻)「トルソー」「かたらい」第9回(彫刻)「角巻」「金魚」「鯨」「生成」「キッス」第10回(石彫)「津軽海峡」「面」「木彫」「実」第11回(洋画)「ねぶた」「かくまき」「えんぶり」第12回(彫刻)「地球」第13回(彫刻)「金魚」「さかな」「音の通る形態」「日時計」「ネアンデルタール人類」
(参考)瀬木慎一監修『日本アンデパンダン展全記録』(装美社、1993)
- (9) 「サライインタビュー 鈴木正治」(『サライ』第22号12～16頁、1998)によると、「彫刻や絵を実際に始められたのは」という間に、「自身の色彩感覚のなさに気づいたこと」といい、続けて次のように答えている。「彫刻は色をつけないし、それよりも石は削って磨いていくと、その石の自然な色がにじみ出るようにして出てくる」、「そんなところに魅力を感じて、油絵は止めました。」
他に「(私の二十代 第126回)自然の色がいい 彫刻家 鈴木正治」(『北の街』277号、1985)もある。
- (10) 昭和36(1961)年、42歳の正治が美術評論家の中村傳三郎に宛てた書簡を引用し、彼が石彫を始めた動機を紹介している(中村徹「記憶と記録」『北の街』666号、2018)。それによると、昭和30(1955)年に東京国立博物館で開催された「メキシコ美術展」で黒曜石の面(マスク)を見て、素材としての黒曜石の質感にとりつかれ、石彫を始めたという。木彫にカシュー(西洋うるし)を塗り耐水ペーパーで磨くなど、独自の方法でその表現を目指したことを語る。
傳三郎は、昭和36(1961)の第12回中央美術協会展に出品した正治の作品「金魚」などを高く評価した(『中美』第71号、1961)。当時の資料や二人の間で交わされた貴重な書簡の内容については、中村徹氏よりご教示を受けた。
- (11) 前掲(9)
- (12) 「青森ひと山脈」朝日新聞に掲載された正治84歳時のインタビュー記事(2004年8月28日から5回連載)

齋藤コレクション／鈴木正治石彫・主要作品 I



1

誕生

図版番号
タイトル
制作年
寸法(cm)
備考
登録番号

46×25×25
大理石
2277-31-2



2

誕生

11×6×13.5
大理石
2277-31-3



3

誕生

16×22×14
大理石
2277-31-4



4

誕生

12.5×10×9
大理石
2277-31-5



5

誕生

図版番号
タイトル
制作年
寸法(cm)
備考
登録番号

31×20.2×15
御影石
2277-31-9



6

誕生

30×16×16.5
御影石
2277-31-11



7

誕生

11×6×5
御影石
2277-31-16



8

誕生

13×径4
御影石
2277-31-18



9

ウゴカズ

図版番号
タイトル
制作年
寸法(cm)
備考
登録番号

24×9×5
大理石
2277-32-1



10

ウゴカズ

14×7×5
大理石
2277-32-2



11

ウゴカズ

20×9.5×26
凝灰岩
2277-32-3



12

ウゴカズ

17.8×16.5×9.8
2277-32-4



13

芽

図版番号
タイトル
制作年
寸法(cm)
備考
登録番号

1974年
16×19×9
玄武岩
2277-32-8



14

横たわるトルソー

1970年
15×30×15
石膏
2277-33-1



15

リンゴ樹

14×20×10
大理石
2277-33-2



16

リンゴ

30×20×20
花崗岩
2277-33-5

齋藤コレクション／鈴木正治石彫・主要作品Ⅱ



図版番号 17
タイトル リンゴ
制作年
寸法(cm) 10.5×径10.5
備考 大理石
登録番号 2277-33-11



図版番号 18
タイトル リンゴ
制作年
寸法(cm) 12×11×12
備考 岩塩か
登録番号 2277-33-12



図版番号 19
タイトル リンゴ
制作年
寸法(cm) 21×24×23
備考 大理石
登録番号 2277-33-72



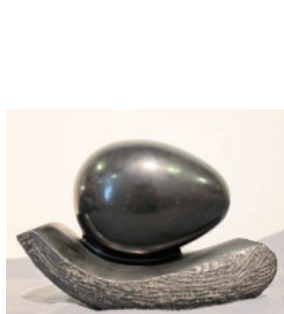
図版番号 20
タイトル 1 (いち)
制作年 1990年
寸法(cm) 40×14×9
備考 大理石
登録番号 2277-33-3



図版番号 21
タイトル 笑
制作年 1995年
寸法(cm) 32×25×8
備考 御影石
登録番号 2277-33-59



図版番号 22
タイトル 笑
制作年
寸法(cm) 8.5×6×6.5
備考 御影石
登録番号 2277-33-60



図版番号 23
タイトル 卵
制作年
寸法(cm) 20×30×13
備考 黒色泥岩
登録番号 2277-33-4



図版番号 24
タイトル マルイ虹ミタ
制作年 1998年
寸法(cm) 18×16.5×8
備考 大理石
登録番号 2277-33-10



図版番号 25
タイトル 水牛
制作年 1999年
寸法(cm) 15×22×11
備考 大理石
登録番号 2277-33-18



図版番号 26
タイトル スイカ
制作年
寸法(cm) 6×11.4×6
備考 御影石
登録番号 2277-33-22



図版番号 27
タイトル 八甲田山
制作年
寸法(cm) 16.5×径5 (大)
備考 御影石
登録番号 2277-33-10



図版番号 28
タイトル 角巻
制作年
寸法(cm) 15×12×7
備考 黒色泥岩
登録番号 2277-33-65



図版番号 29
タイトル くるみ
制作年
寸法(cm) 11×6×6
備考 御影石
登録番号 2277-33-41



図版番号 30
タイトル くるみ
制作年
寸法(cm) 7.4×6×4.4
備考 御影石
登録番号 2277-33-42



図版番号 31
タイトル くるみ
制作年
寸法(cm) 7.4×6×4.4
備考 御影石
登録番号 2277-33-43



図版番号 32
タイトル くるみ
制作年 1995年
寸法(cm) 7.4×3.5×3.5
備考 御影石
登録番号 2277-33-44

齋藤コレクション／鈴木正治石彫・主要作品Ⅲ



図版番号 33
 タイトル 二つのわ
 制作年 1994年
 寸法(cm) 30×24×7
 備考 凝灰岩
 登録番号 2277-33-9



図版番号 34
 タイトル 二つのわ
 寸法(cm) 21.5×19.4×5、34×19×10
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-21



図版番号 35
 タイトル 二つのわ
 寸法(cm) 黒7×7×4、白8.5×8×4.5
 備考 大理石、黒色泥岩
 登録番号 2277-33-57



図版番号 36
 タイトル わ
 寸法(cm) 25×13×9
 備考 錦石、台は木
 登録番号 2277-33-7



図版番号 37
 タイトル 不明
 制作年 1988年
 寸法(cm) 16×14×7
 備考 錦石
 登録番号 2277-33-6



図版番号 38
 タイトル 不明
 寸法(cm) 5×12×8
 備考 黒曜石
 登録番号 2277-33-58



図版番号 39
 タイトル 仏足(仮)
 制作年 1988年
 寸法(cm) 7×9×6
 備考 大理石
 登録番号 2277-33-15



図版番号 40
 タイトル 人
 制作年 1988年
 寸法(cm) 64×45×37
 備考 大理石
 登録番号 2277-33-13



図版番号 41
 タイトル "少女"の石として
 制作年 1990年
 寸法(cm) 16×15×8
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-14



図版番号 42
 タイトル 不明
 制作年 2000年
 寸法(cm) 28×37×22
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-30



図版番号 43
 タイトル 不明
 制作年 2000年
 寸法(cm) 21×12.5×11
 備考 石膏
 登録番号 2277-33-19



図版番号 44
 タイトル 鉄の庭
 制作年 1962年
 寸法(cm) 33×43×10
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-69



図版番号 45
 タイトル 裸婦
 制作年 1962年
 寸法(cm) 10×2.4×2.4
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-26



図版番号 46
 タイトル 仏陀
 制作年 1962年
 寸法(cm) 10×2.4×2.4
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-23



図版番号 47
 タイトル 地藏
 制作年 1962年
 寸法(cm) 7×2.4×2.4
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-24



図版番号 48
 タイトル 地藏
 制作年 1962年
 寸法(cm) 12.5×4×4
 備考 御影石
 登録番号 2277-33-25